トリスタン伝説

佐藤輝夫

トリスタン伝説

流布本系の研究

佐藤輝夫

中央公論社

トリスタン伝説
定価　九八〇〇円
昭和五十六年三月　十　日　初版発行
昭和五十六年八月二十五日　再版発行
著　者　佐藤輝夫
発行者　高梨　茂
印刷所　奥村印刷
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替東京二―三四
©一九八一　検印廃止

トリスタン伝説　目次

研究篇

第一部　トリスタン伝説の偉大と衰微、その現代における復権　5
第一章　トリスタン伝説の復権と埋没詩篇の発掘　5
第二章　伝説の流布と現存諸本の相互関係　15
第三章　原物語探求へのミラージュ　32
第二部　伝説起源考　55
第四章　伝説のケルト起源に関する問題（一）　55
第五章　伝説のケルト起源に関する問題（二）　86
第六章　トリスタン伝説のフランス語圏への渡来について　117
第三部　流布本系物語祖本の探求　147
第七章　いわゆる流布本系と風雅体系の二流の分立について　147
第八章　ベルールとアイルハルトの対比的考察（一）　樹下の密会とその跡始末の場面　153
第九章　ベルールとアイルハルトの対比的考察（二）　モロアの森の場面　189

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一〇章　流布本ベルールに欠落せる前半部分の推定「フィルトル」の場面を中心に　245
第一一章　アイルハルトと乖離後のベルール本の展開　306
第一二章　O本を通して見る流布本後部の展開　329
終章　流布本系伝説の構造と風雅体本　376

資料篇

トリスタン・イズー物語　ベルール作　流布本系

一　樹下の密会——泉水　423
二　矮人フロサンの奸計　425
三　トリスタンの逃亡と妃イズーの裁き　444
四　モロアの森林　452
五　隠者オグラン（和解）　467
六　裁き　494
七　報復　522
流布本系　トリスタン・イズー物語訳注　568

トリスタン物語　トマ作　風雅体本

序　587
果樹園の章（続き）〔ケムブリッジ断片〕　589
トリスタンと白い手のイズーとの結婚の章〔スネイド断片〕　595
人形（ひとがた）の広間の章〔トリノ断片の一〕　599
妃の行列〔ストラスブール断片の一〕　650
物語の終章〔トリノ断片の二〕　665
〔ドゥース断片〕　670
風雅体本　トリスタン物語訳注　671
あとがき　778
主要人物並びに地名表示対照表　787
トリスタン伝説関係書誌目録抄
索引

トリスタン伝説——流布本系の研究

研究篇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一部　トリスタン伝説の偉大と衰微、その現代における復権

第一章　トリスタン伝説の復権と埋没詩篇の発掘

一

トリスタン伝説はイギリスの辺境に住む古代ケルト民族の持った恋の逃避行（駈落もの）にその萌芽を発し、それがアイルランド、ウェイルズ、コーンウォール、そして大陸のブルターニュ半島、この四つの地域を絡める海洋の波に揉まれ、ヒースや山毛欅の密生する大森林や原野を舞台として、これまた多分にケルトの人々の間で十世紀の終りごろその原始的形態を取ったものと思われる。そしてその形態も、一〇六六年ノルマンジー公ギョームが海を渡ってイギリスに押し渡り、その地にアングロ＝ノルマン王朝の基礎を固める前後にはなおいまだ血腥い素朴な説話でしかなかったであろう。それから約一世紀近く経過した十二世紀の漸くその前半が終ったころ、プランタジュネ・アンジュー伯家のフィツ＝エムプレス（Fitz-Empress）ことアンリが、フランス最初のトゥルーバドゥール（吟遊詩人）ギョーム九世の孫娘で、ポアトゥーからギュイエンヌ、更にはアキテーヌまで、大西

洋岸に沿ってフランス国土の三分の一にも当る広大な領土の相続者である、アリエノール＝ダキテーヌと結婚し（一一五二年）、その妻の相続によってフィッ＝エムプレス・アンリはイギリス王ヘンリ二世となり、イギリス王国のほかにノルマンジーからピレネーの山裾にまで至るいわゆるアングロ＝アンジュヴァン帝国の主（一一五四年）となるころ、――遅くともそのころまでに、さきの血腥い恋の逃避行―駈落ものでしかなかった物語が、ロンドンあるいはポアチエの絢爛たる宮廷を雰囲気とする場処で、今様の恋の物語に書き改められた。……

これは勿論筆者の推定である。けれどさきの単なる恋愛逃避の説話から今様の恋の物語へのこの伝説の変身がどういう過程を辿って為されたか、それは想像以上に複雑なものをその間に秘めている。単なる駈落ものからいきなり優雅な恋の物語に変身したのか、それとも暫くのあいだは、マルクとイズーとそしてトリスタンとの愛のもつれを歌ったさまざまな小さな歌謡（Lais）の形で流布されていたものを、さきに述べた一一五〇―六〇年の頃のある時点で、それを長篇の物語にまとめあげられたのか、そしてそのケルトの題材をフランスに伝えたものは何者なのか、その辺のところも定かではない。けれどこの書き改められた物語こそそれ以後二〇〇年、否、ルネッサンスの中期に至る三〇〇年もの長いあいだにヨーロッパ世界に筍生するいわゆる〈愛と死の物語〉の、これがその原拠となる。これも亦推定である。けれどこの推定はさきの推定以上の重みをもち、今日トリスタン伝説の研究に手を染める多くの人々がほぼ一致して承認する推定ではある。なぜなら死に至る持続する愛という宿命的悲恋のテーマを、これが既にして含んでいたことはその間にニュアンスの相違はあっても、後続展開するヨーロッパのすべてのヴェルシオン（諸本）に、これを推定せしめる種々の要素を含まないものはないからである。

今日残存するこの伝説のヨーロッパ的分布を考えると、かくしてこの今様の「物語」はその持つテーマの魅力のためにそれが書かれて五〇年そこそこの間に、フランス並びにアングロ＝アンジュヴァン王朝の支配する領域

を超えて、ドイツに広まり、そこから更に北はデンマルクから南はイタリア、イスパニア、東はチェコ、あるいはもしかするとスラブ語圏内にまで広まっていった。そして十三世紀末にはアングロ＝サクソン語をもって発生の地イギリスにまでも返り咲くのであった。しかもその流行は宮廷貴族の世界にのみ読者層（聴衆）を持つのでなく、その頃から漸く抬頭し始めた町人階層にまで及び、そしてその形態も宮廷風雅体からもう少し裾野を拡げ、一般流布すなわち散文化の形を取って、時に応じてはあるいは繊細に、あるいは興趣の枠を拡大して素朴に語られ、あるいは大河の如く汪洋として流れる大物語に、あるいは工夫を凝しての全篇要約の形に、あるいはさわりの部分を抜き出してこれを他の物語の中に象嵌したり、あるいは鑑賞用の豪華な写本を飾るミニアチュール（粧点絵）に、また宝石筐の蓋を飾る彫刻に、室内装飾用のタイルにと、この悲恋の伝説は描かれた。そしてこの物語の流布するところ、自らをトリスタンに擬して、おのれの愛をトリスタンの愛になぞらえて、自作の詩に歌い入れた詩人はその数を知らない。ところがそれら一切のものがある日忽然として姿を消す。ルネッサンスの到来がヨーロッパ人の嗜好を古典古代の世界へと一変させた。トリスタン伝説はかくして十六世紀の中頃（ジャン・モージャンの『新版トリスタン』(*Nouveaux Tristan*)は一五五四年の刊行である。）までに、それから約三〇〇年に近い眠りに入る。そしてヨーロッパ世界にこの伝説を復活させるためには、十八世紀末から十九世紀の初頭に始まるロマン主義の中世復興の熱気を待たねばならなかった。これは歴史がわれわれに教えてくれる。

二

この復興の口火を切るのはフランス・ルイ王朝末期の貴族トレサン伯（一七〇五―一七八三年）が、一七七六年にその主宰する「世界の物語文庫」（*Bibliothèque universelle des romans*）に要約掲載した、『レオノアのトリス

タン』である。これは十六世紀末にルーアンで刊行された散文『トリスタン物語』の現代語版の抄訳にほかならぬ。[1] けれどその物語が、理性万能の啓蒙思想にようやく飽いて、精神が自然と原始的なものに眼を向けつつあった十八世紀の後半中頃という時点にあって、一方に於てミヨ、[2] ラキュールヌ・ド・サント＝パレ[3]その他に由る南方吟遊詩人（トゥルーバドゥール）たちの復権への努力と共に、人々の心を自国の過去に向けさせる一つの座標となったことは事実のようである。しかし同時にそれはまたトリスタン伝説の退化し、変質をした形をしか示さない伝説の中世末期の姿を、垣間見させるに過ぎなかった。この伝説を真にその最盛時に於てあった姿をもって示すためには、それから十年近くののちの一七八五年にフリードリッヒ・ミュラー（Friedrich Myller）によって刊行される、ゴットフリート・フォン・シュトラスブルクのハンブルク写本の刊行を待たねばならない。この写本はこの時よりもなお半世紀以前の、一七二二年からその存在が知られていながら、[4] 中世に寄せる好奇がなおいまだ熟していなかったために、人々はこの無限に貴重な宝物を無視していたのである。次いで、イギリスでは当時売出したばかりの新進作家ウォルター・スコットが、中世英語をもって書かれた『サア・トリストレム』を、エジンバラの法曹団図書館で発見し、一八〇四年にこれを刊行した。[5] こういったぐあいに、十九世紀初頭のロマン主義の興隆は、それに同調する学者、詩人、小説家をして挙って図書館をまさぐらせ、ただこの伝説のみならず広く中世の文芸詩歌を、その三〇〇余年にわたる埋没の中から発掘させ、これを刊行させるに至った。こうして今日残存するこの中世伝説の最初の発掘とその刊行という、第一義的事業は開始されるのであるが、その陣頭に立つのがドイツではフリードリッヒ・ハインリッヒ・フォン・デル・ハーゲンであり、フランスではフランシスク・ミシェルであった。

フランシスク・ミシェルは、『ローランの歌』の最古にして且つ最も美しい写本（オックスフォード、ボードレイ

アン・ライブラリー所蔵写本）の発見者として、また中世最盛期の武勲詩、物語文学、古記録などの夥しい数の写本の発見者且つ刊行者として、フランス中世文献学の世界にあっては、パイオニア的役割を果した人である。一八三三年、時の文相ギゾー宛に、イギリス各地の図書館を歴訪してそこに眠る古代フランス文芸に関する知見を拓きたい希望に燃えて、自己推薦の手紙を書き、それが容れられて在外研究員となって渡英したとき、彼は弱冠二十四歳の若さであった。彼は既に『シャトラン・ド・クーシーの詩歌』、『ベルトラン・デュ・ゲクランの記録』、ジョアンヴィルの『聖王ルイ九世伝』その他の、古詩・古記録を発掘刊行しており、ヘルダー、グリムによって刺戟を与えられた〈民族の過去の遺物〉への志向を、身をもって体得していたフランスの典型的ロマンチックの一人であった。その彼が憧れの地イギリスに於て何を見、何を発見し、何事を為したかは拙著『ローランの歌と平家物語』上巻第二章に於て詳説しているので繰返さない。彼の名はこの『歌』のオックスフォード本の発見とそのエディション・プランセプ（原初版本）によって、『歌』の歴史にあっては永遠に記憶されるであろう。その彼はロンドン滞在中になお夥しい数のフランス文学関係の物語や古記録を刊行するが、その中でも『ローランの歌』のエディション・プランセプと対を為す大きな業績が、『トリスタンの綺談に関する今日残存せる詩作品の全蒐録』と称する三巻本であり、これはまだ十分にわが国では紹介されていない。(6)

フランシスク・ミシェルは渡英後、中一年を置いた一八三五年に、上記の『全蒐録』（以下略号『蒐録』とする）最初の二巻を刊行した。上巻は十二型三四一ページ、中巻は三二三ページを数える。上巻には、

（1）今日ベルール作として知られるパリ国立図書館所蔵写本 fr. 2171 の「断片」四四二四行の全部

（2）スイス、ベルヌ図書館蔵『狂恋のトリスタン』五七五行

の全部を納め、中巻には、

（3）『トマの物語』の断片中最大の行数を持つ、ボードレイアン・ライブラリー所蔵写本中の「ドゥース断片」全一八一五行

（4）同じくボードレイアン・ライブラリー所蔵『狂恋のトリスタン』全九九六行

（5）マリー・ド・フランス作短曲歌謡物語『すいかずらの歌』全一一八行

（6）教化文学『恋人の秘言』の中に引用されたトリスタン関係説話「うぐいす」全一七〇行

の全六篇が納められている。このうち（1）のベルールの断片は、一八二二年フォン・デル・ハーゲンによってその『ゴットフリート・フォン・シュトラスブルク著作集』[7]の中で、附録篇として活字に附されているし、また（5）のマリー・ド・フランスの『すいかずら』は、その二年前の一八二二年にロックフォールによって『マリー・ド・フランス詩歌集』第一巻の中で掲げられているのを除けば、他の四篇はいずれもフランシスク・ミシェルの手によって初めて活字に附されたものである。従ってミシェルのこの刊行は当時にあっては、否、今日にあっても、なお歴史的に高い価値を持っている。

抑々彼は渡英後一年半歳にも満たぬ短い時間に、如何なる努力を蕩尽したのであろうか。ここに彼が網羅した六個の断片は、現在位に於てトリスタン伝説に関する、アングロ＝ノルマン方言に成るものを含めた、フランスに於て識られる遺物の九割以上に亘るものであるが、これらのテキストに加うるに七六ページに亘る長大な序文を附し、更にそれには四八ページを費して一二四個の注を加えている。中巻には、五五ページにわたってテキストのノート・クリチックを、更に三七ページに及ぶ語彙篇が載せられている。これが一年と六ヵ月という短い歳月のあいだに、イギリス、それも主としてオックスフォードの図書館のほの暗い書庫の中で脇目も振らずに刻苦して積み上げた成果である。ジョゼフ・ベディエならずとも、如何に〈タンタジェールの魔法〉が彼ミシェルを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com